

2026U12ブロックDC インテグリティ講習資料

2026/8 JBAユース育成部会

明日からコートと家庭に持ち帰る、14の育成マインド



JBAユース育成
は長期的視点。



子どもは大人の
縮小版ではな
い。



育成年代の活動
動は「教育的」
であること。



「強化」ではな
く「個の成長
(育成)」を。



多様なニーズを
受容し、楽しさ
を植え付ける。



勝利を目指す
が、土台作りを
最優先に。



教えすぎ注意。
判断力を育む。



マンツーマンは
「個の成長」の
ツール。



保護者は
「24時間ルール」
の徹底を。



PHVと生月
(RAE) のバイ
アスを知る。



早期専門化によ
るケガ・燃え尽
きを防ぐ。



バスケット以外の
経験もバスケット
に活かす。



スポーツの価値
(良き社会人)
を残す。



種まきの季節
(U12) に収穫
を焦らない！

2026年、その先へ。未来をさらによくしていこう。

インテグリティ（誠実さ）とスポーツマンシップの遵守



絶対的根絶

暴言・暴力・ハラスメント

恐怖で支配する環境は「バスケ嫌い」を生むだけであり、育成現場において一切許容されません。

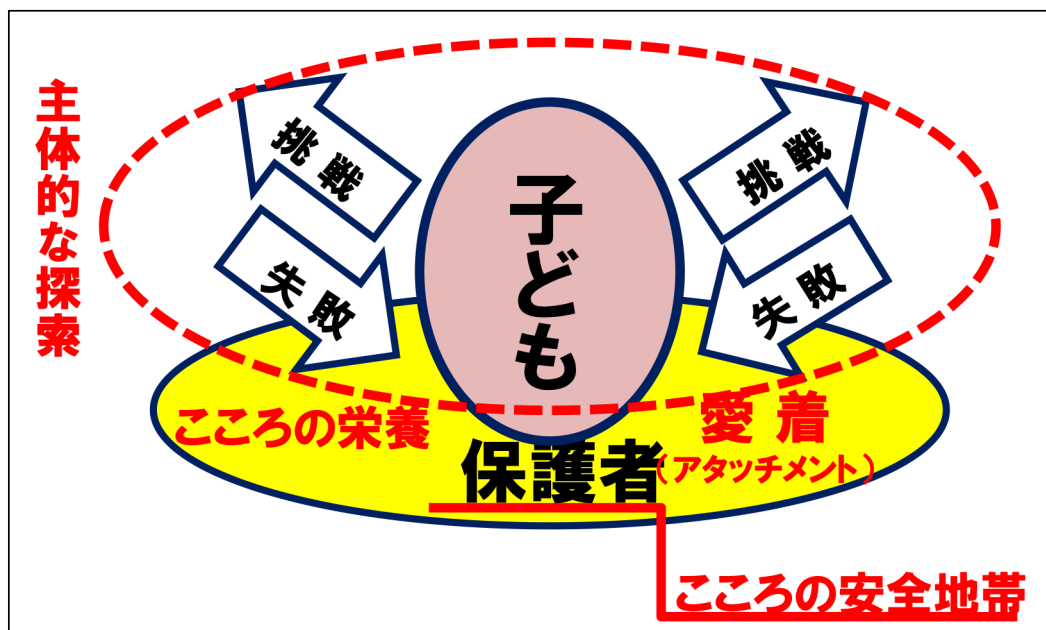
究極の目標：
社会で輝く「良き社会人」の育成

他者（審判・
相手・仲間）
へのリスペクト

フェアプレーの
精神の体現

どんな状況で
も全力を尽く
す姿勢

バスケットボールは、人間力を育むための
最も優れたツールの一つです。



アタッチメントのつくり方

- 目を合わせる
- 笑いかける
- 語りかける
- 触れ合う
- 感謝を伝える
- 努力や過程を認める

信頼関係
ラポール

自分のことを
気にかけてくれている

↓
自分のことを
分かってくれている

↓
安心して
挑戦することができる

【川上康則 2022 教室マルトリートメント. 東洋館出版社. p.180-181 要約引用】

コート・家庭において「こころの安全地帯」を！

本質的な課題とは？

本質的な課題とは？

大人（指導者保護者）が勝利を求めすぎている
（スポーツの捉え方が一面的）

子どもがバスケットをどの様に楽しみたいかを考慮していない
（コーチの役割：ニーズのギャップ）

子供を支配的に動かすことがスポーツ指導だと思っている
（コーチング方法の間違い、方法理解不足）

現場での悩み

笛を吹くのは誰か：法の領域への急速な移行



Key Insight

パワハラ・指導ハラスメントへの規制が強化される中、コート上の「相当性」や「社会通念」を判断するのは、もはや現場の指導者ではなく裁判官や弁護士など「第三者」に委ねられています。

人間関係の摩擦が、道德の問題から「法の領域」へと急速に移行しているのが現代のコートです。

大前提：「規制反対」ではない



Core Premise

ハラスメント規制は絶対に必要です。守られるべき選手たちが、長年守られてこなかった事実から目を背けることはできません。

現代のコートにおいて、暴力や恐怖による支配は「時代遅れ」ではなく「明確なルール違反」です。

指導環境のパラダイムシフト

過去の指導環境 - 道徳と関係性で調整

明文化されない規範

「空気」や「文脈」への依存

暗黙の了解で成立するが、
密室化しやすい

現代の指導環境 - 法とルールで処理

ルールの明文化と遵守
(明文化されない規範=リスク)

透明性と説明責任
(空気・文脈への依存=説明責任不十分)

客観的な正当性が常に求められる

現代のコートに起きている「副作用」

「厳しさ」が「ハラスメント」と誤認される不安



指導・育成・責任追及の回避



判断回避とコーチングの機能不全

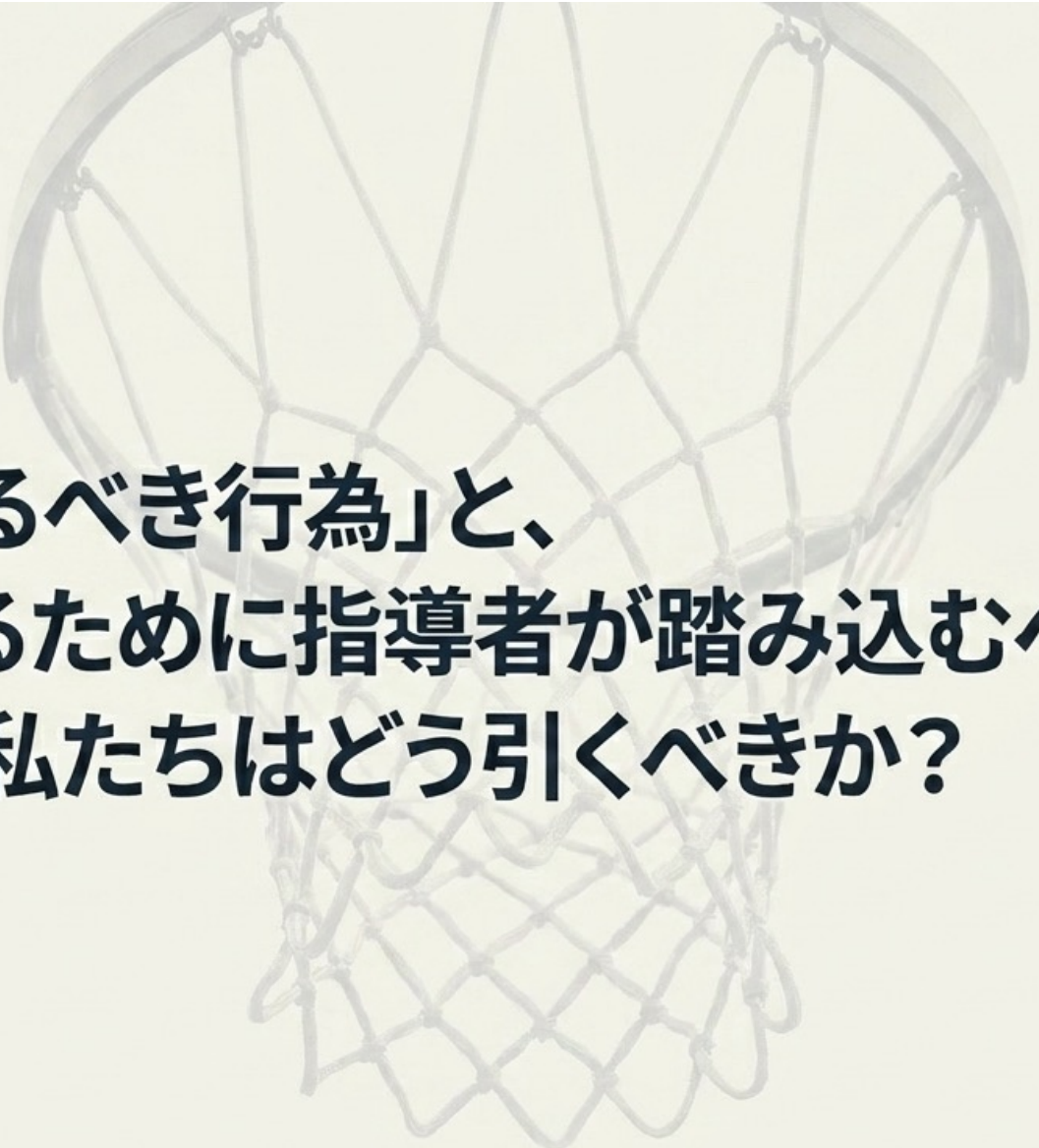
厳格化の副作用として、指導者がリスクを恐れ、選手の成長に必要な介入すら諦めてしまう「現場の萎縮」が起きています。

「セーフか、アウトか」という思考の罠

指導の価値を「善悪」や「成長」ではなく、
法的な「セーフ／アウト」だけで考える文化が蔓延しています。



法は“最低限の安全装置”に過ぎません。法をクリアしているからといって、
それが「良い指導」であるとは限りません。
法がコーチングのすべてを決定する状態は、健全ではありません。



核心への問い

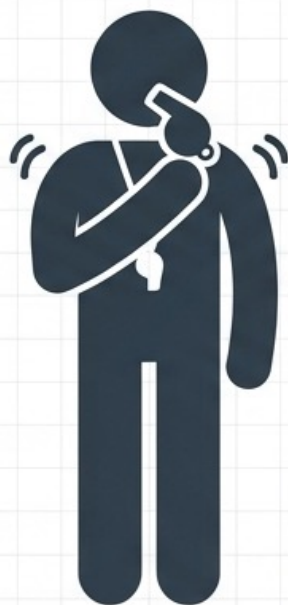
**「法が止めるべき行為」と、
「人を育てるために指導者が踏み込むべき行為」の
境界線を、私たちはどう引くべきか？**

何が
ハラスメントなのか？

コートで立ちすくむ、現代の指導者たち

「ハラスメント」 への強い意識

厳しい言葉や注意に
対する躊躇いと恐怖



「育てる」責任と 勝利への想い

目の前のミス（怠慢な
プレイなど）を正し
たいという衝動

👉 現場は、守りたい気持ちと、育てたい責任の間で激しく揺れ動いている。

まず全員で共有すべき「絶対的な前提」

- ✕ 暴力・暴言・人格否定は、決して「指導」ではない。
- ✕ 恐怖で従わせることは、教育でもスポーツでもない。
- ✕ ハラスメント規制は、未来の子どもを守るために絶対に必要である。

👉 これらは妥協なき「全員の共通認識」である。

「どこからがハラスメントか？」が生む弊害



Step 1: 選手がミスをする（責任を放棄したプレイ）



Step 2: 指導者が「ハラスメントになるかも」と迷う



Step 3: 結果として「何も言わない方が安全」と判断する

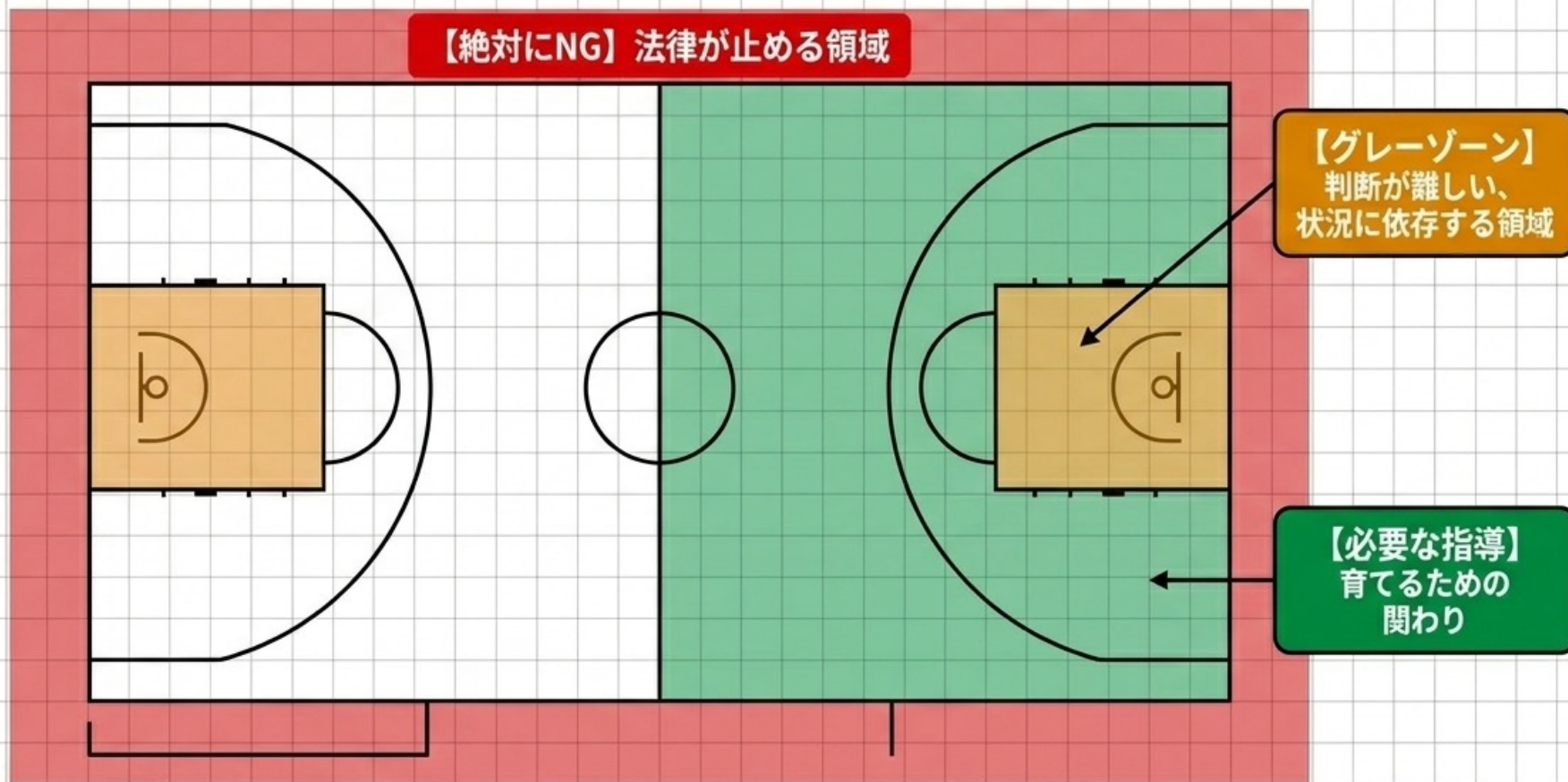


- ・ 成長のための「注意」が消滅する。
- ・ 子どもが自分のプレイに対して「責任を教える機会」が失われる。

👉 守るためのルールが、皮肉にも「育てる力」を弱めていないか？

スポーツ指導を切り分ける「3つのゾーン」

曖昧な恐怖を取り除くため、指導のグラデーションを視覚化し、コート上の現在地を把握する。



【ゾーン①】

コートに持ち込んではいけないもの

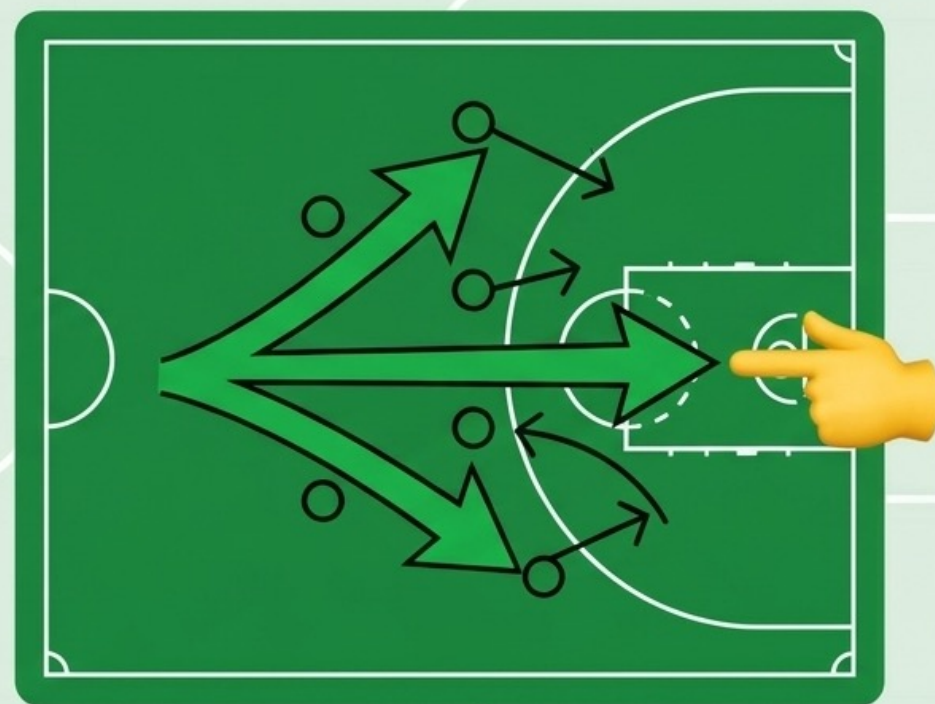


- ⚠ 身体的暴力：叩く・蹴る・物を投げる
- ⚠ 精神的暴力：人格を否定する言葉（「お前はダメな人間だ」「消えろ」）
- ⚠ 権力の乱用：立場（スタメン権限や評価）を利用した威圧やいじめ

ここには一切の議論の余地はない。
直ちに退場（指導停止）となる絶対的レッドゾーン。

【ゾーン③】 成長のために「譲ってはいけない」厳しさ

- ✓ 明確な指摘：プレイのミスや怠慢（例：ルーズボールを追わない）をはっきりと指摘する。
- ✓ 責任の所在：チーム内の役割に対する「責任」をしっかりと取らせる。
- ✓ 熱量のある厳しさ：本気で選手と向き合い、妥協を許さない姿勢。



指導者が自信を持って踏み込むべき、スポーツの本質的な育成領域。

【ゾーン②】最も戸惑う「境界線」の正体

伝達要素：言い方・声のトーン・タイミング（例：全員の前で吊るし上げる）



関係性：指導者と選手の信頼関係の深さ・選手の年齢や成熟度

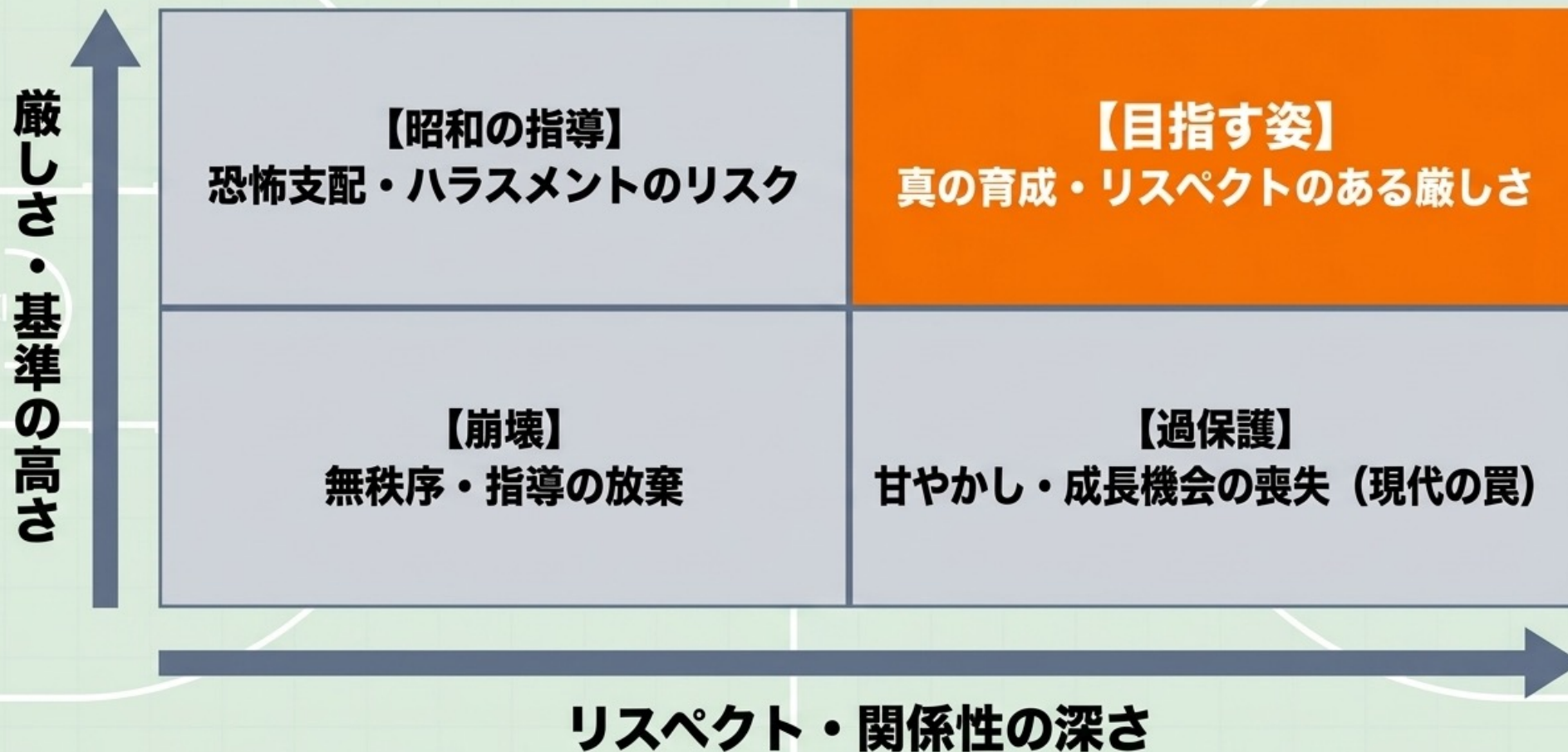


受信側：本人の受け取り方・性格的特性



👉 現場と社会が直面する最大の課題は、指導の「中身」ではなく「周辺要素」でハラスメントに転化するこのエリアの扱い方である。

比較マトリクス：あなたのチームの現在地



どう対応するべきか？

「叱らない」のではなく「どう叱るか」

子どもを傷つけない。
でも、甘やかさない。



安全は「ルール」で守る。

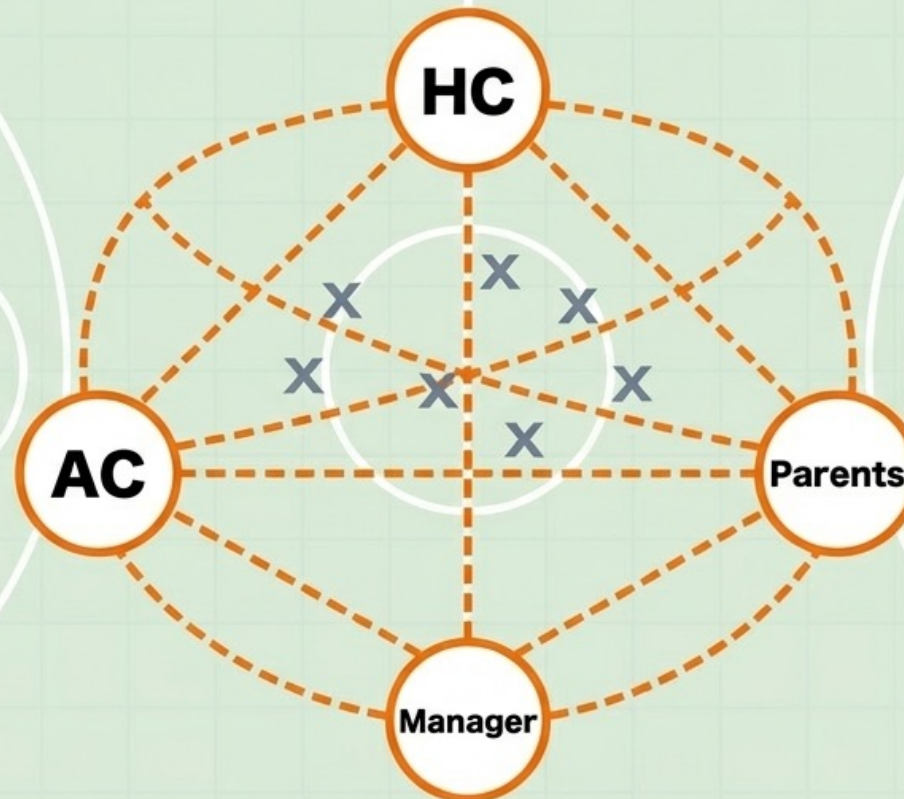


成長は「関係性」の中で支える。

チームディフェンスとしての指導体制

複数の目

一人で抱え込まず、
スタッフ全員で指導の
現場を見る仕組みを
つくる。



意図の共有

指導時の「言葉・目的・
根拠」をスタッフ間で
ブラックボックス化せ
ず・に共有する。

👉 「指導者が孤立しない仕組み」が、結果的に子どもと指導者双方を守る盾となる。

明日のコートで実践する「3つのアクション」

☐ 目的の言語化

「なぜそのプレイを指摘するのか」根拠をセットで伝える。（感情ではなく論理）

☐ タイミングの最適化

チーム全体の前で吊るし上げるのではなく、個別に呼んで修正する。（逃げ道を作る）

☐ プレイと人格の分離

「人間性」を否定するのではなく、「プレイの選択」にフォーカスして指摘する。
（YouではなくItを主語に）